

題材「ざりがにと遊ぼう」の中で

## 有孝の感動と教師の働きかけ

●いろいろな活動の中で種々の葛藤の場がある。そしてそれは自分自身に対するイメージの修正からくるものもあるだろうし、友達との考え方の違いからくる社会性にかかわるものもあるだろう。そのどちらも非常にその子どもの伸びにつながっていくが、その葛藤の場をうまく乗り越え次のステップとできるような集団の育ちを有孝の言動から考えさせられた。

— 31 —

題材「木の実、草の実」の中で

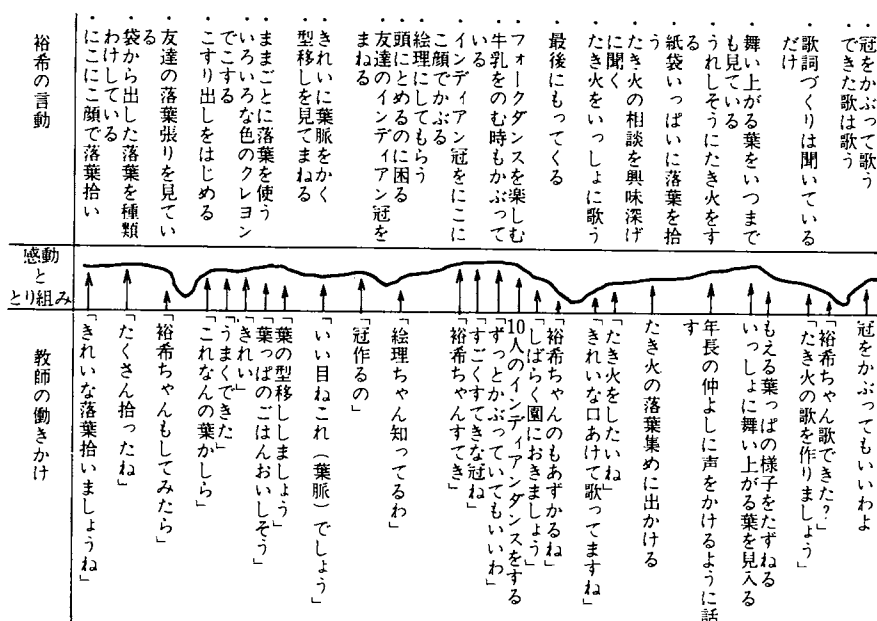
英彦の言動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察台のどんぐりをよく触れる</li> <li>・あまり興味を示さない</li> <li>・「みんなの話合わせたらいいね」</li> <li>・「おもしろいもう一回して」</li> <li>・海にいつてくじらにのまされた話にする</li> <li>・「どんぐりつて手あるかな」</li> <li>・「紙芝居作つたらいい」</li> <li>・友達が言うときはいろいろアドバイスするが自分ではあまりいいわない</li> <li>・「ペーアサートの劇できる」</li> <li>・しばらくだけいっしょにリズム打ちする</li> <li>・「僕のはこんな音するぞこれ面白い音やね」</li> <li>・友達の作った楽器が気になつて見まわる</li> <li>・「どんぐり楽器や」</li> <li>・「こまもつくれるよ」</li> <li>・「いっばい拾う」</li> <li>・「ほんとに池に落ちてる」</li> <li>・「どんぐりころころを歌う」</li> <li>・「どんぐりいっばいや」</li> <li>・くつつけてロケットなどをえかく</li> <li>・「てっぽう玉や」</li> <li>・「これもくつつく」</li> <li>・いのこずちを友達につける</li> <li>・雑草園でいのこずちを見つける</li> </ul>
感動と とり組み	
教師の働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部屋にかざる</li> <li>・みんなの前で紙芝居をする</li> <li>・「そうしましょう」</li> <li>・「ペーアサートをまわつてお話づくり</li> <li>・どんぐりのペーアサートを見る</li> <li>・カセットで曲をならしたりピアノで曲を弾いたりする</li> <li>・「亮子ちゃんのいうように楽器にもなるね」</li> <li>・「どんぐりで何して遊ぶ」</li> <li>・散歩に出かける</li> <li>・ネルを出す</li> <li>・友達のおなみを見せる</li> </ul>

英彦の感動と教師の働きかけ

●英彦は感動したこと、やりたいことなどをすぐ教師に知らせたり、行動に移す子なので教師から助言指導するより見守りを多くしてより英彦の主体的な行動を育てたいと考えていた。しかし、実際に英彦の言動と教師の働きかけを洗い出してみると、英彦は感動やおどろきをもったことを予想よりも行動に移していないことに気づいた。友達とのかかわりが多くていっしょにリズム遊びを楽しんだりするがすぐ他へ移ったり、友達にアドバイスをしたり手伝ったりするが自ら夢中になるものがあったより少ない。英彦の感性の度合いを十分知らなかったことを反省すると共に、見守りすぎていた指導のあり方を反省した。探索したり想像したり、また創造したりしている時間を十分設けるだけでなく、英彦に声をかけて工夫したり発見したことなどをもっと聞き出し、抱いたイメージをはっきりさせたり、課題追求する手だてを意識化させればよかった。どんぐりで楽器あそびをした時、そのような配慮をしていたら、もっと活動が展開し、いろいろなリズム遊びや歌づくりもできたかもしれない。

●英彦は5月生まれということもあってか、楽しい想像をめぐらしてくれるし認識の上に成り立った考えをしているようだ。奈美がどんぐりに手をかいたら「ええっどんぐりに手なんてあるけえ」と言ったり、音が大きい楽器を見て、「これ、どんぐり20個以上入つとるもん」などと話す。表現のせいかでも認識のせいかが多くかかわってくるのは当然であるがその度合いは全くひとりひとり違っている。そしてそのかかわり具合がどうであるかを教師が把握しておかないと表現を楽しむ場や、何かにつまづいている場でその子に合った適切な助言や共感励ましの声かけができないだろう。子どものもつあこがれを大切に絶やさずにしていきたいと思う。

# 題材「落葉で遊ぼう」の中で

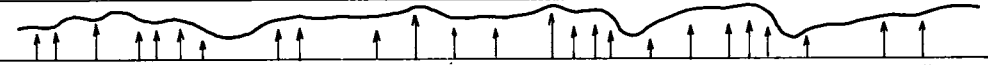


## 裕希の感動と教師の働きかけ

●裕希は一学期中朝のあいさつの他はほとんど話してくれず、またいろいろな活動もいやがらずにはするのだが楽しい様子もあまり見せず、教師としてどうしたら裕希の心の中に入れるか暗中模索の状態だった。裕希が心を開いてくれることを願い、できるだけ声をかけたり、裕希がちょっとでも興味を示したのに見逃がさずその活動を援助してあげたりするよう心がけた。しかし結果的に見て、教師の助言や配慮はかえって裕希の行動にプレッシャーをかけたようだ。「これをしようかな、それとも……」と感動やおどろきをもったものから何かをやりたいとの気持ちになってきたところに教師の声かけがされる。感動を十分味わって想像のつばさを広げようとする時間がその声かけのためにそがれてしまった。子どもの楽しむ場を保障していこうとする教師の働きかけが、逆に楽しむ場をうばってしまう。裕希の場合だけでなく、それは他の子どもにとって言えることだと思う。教師の声かけすぎも非常に問題である。もっと子どもを信頼して待つ心をもてばよかったと反省する。いっしょに子どもと感動する、その姿を見守る、そのあと自由にしたいことを見つけるまで待つことも指導のひとつだと思った。そして見守り待っている時に、あまり感動やおどろきを示さない裕希の様子が捉えられ、ちょっとした表情や行動から、裕希なりの感動の表わし方がわかってくるし表現のせいかいへ導ける手だてがわかるのだろう。

●インディアン冠を頭にどうしたらつけられるか困っていた時、直接教師が指導せず仲よしの絵理に手助けするような助言をしたのはよかった。たき火の歌づくりでも好きな友達の作った歌を歌う時はうれしそうだった。友達をなかだちとした活動の広がりはやはり指導上とても大切にしていきたい面である。裕希のような子にはそれがイメージ実現や課題追求の手助けとなるのだろう。

題材「いもとなかよし」の中で

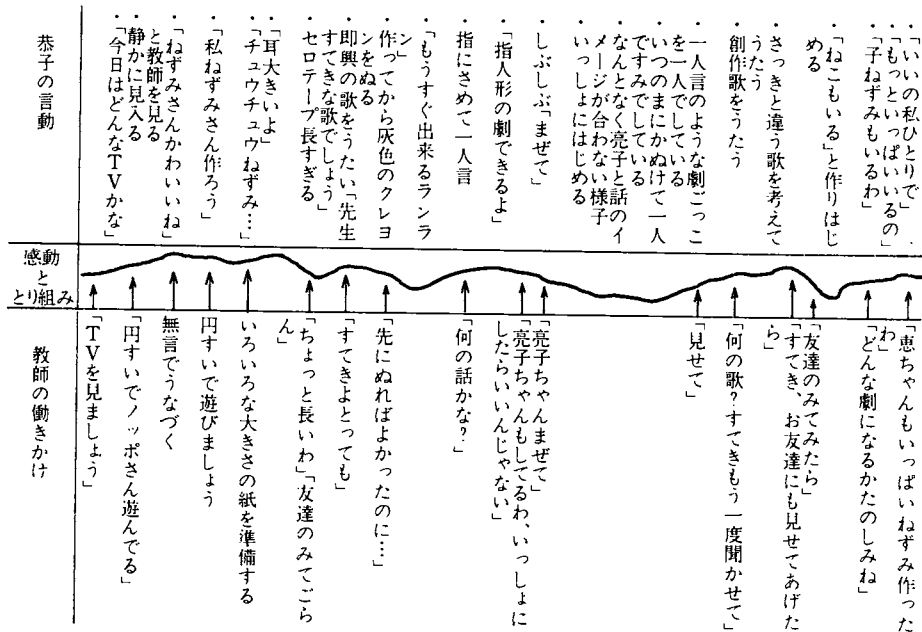
雅司の言動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・こわしては作りくりかえす</li> <li>・これロボット万頭などねんどみたく作る</li> <li>・はずきんでつぶす</li> <li>・リズムに合わせて切るま</li> <li>・大喜びで体表現する</li> <li>・天ぶらにして食べた</li> <li>・「まだ遊びたい」</li> <li>・ピアノに全く気をむけないではんこ遊びをする</li> <li>・「ロボットはんこをつくる」</li> <li>・「ベタベタはんこになる」</li> <li>・「なーんだ」</li> <li>・いもの中にかぶとの幼虫などが住んでいるのにかくかぶとの幼虫はったから」</li> <li>・「どうして穴があるやろ」</li> <li>・たのしく絵をかく</li> <li>・「土とんや」</li> <li>・ほる姿をする</li> <li>・大小のいもをいっぱいかく</li> <li>・「でぶっちよいも僕掘ったんや」</li> <li>・いも掘りの歌に合わせて掘る</li> <li>・「ここにいもあるんかな」</li> <li>・「運転手のことでけんか僕、運転手になる」</li> <li>・「何でいくんや」</li> <li>・「もつとしたい」</li> <li>・「お腹すいたらこうするの」</li> <li>・「いも掘り遠足早く行きたい」</li> </ul>
感動と取り組み	
教師の働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>「好きな形にして食べましょうか」</li> <li>いもきんとんを作る</li> <li>いもほりごっこしてそのあと料理まねっこをする</li> <li>「家でおいもどうした？」</li> <li>ロボット歩きではんこを押しましょう」とリズム遊びに誘ったりを誘う</li> <li>知っている歌をピアノで弾きリズムけずったわらびしを用意する</li> <li>いもを使った遊びを考え合う</li> <li>いもを切ってみる</li> <li>想像したことを描かせる</li> <li>「何かの虫さんあけたのかね」</li> <li>「どうして穴があいているか考えさせる」</li> <li>穴のあいたいもを見せる</li> <li>白と茶の色画紙をくつつけた紙をわたす</li> <li>いも掘りの歌をうたつても掘りを思い出させる</li> <li>紙にいもの絵をかくように話す</li> <li>とれたいもを並べる</li> <li>「うんこ」しよ」のいも掘りの歌をうたつて掘る</li> <li>順番にするよう声をかける</li> <li>バスごっこする</li> <li>バスごっここの歌を歌う</li> <li>「バスよ」</li> <li>「雅司ちゃんの考えたのにしましう」</li> <li>「焼いもグーチーパーをする」</li> <li>「農場にも虫いっぱいいるわよ」</li> </ul>

雅司の感動と教師の働きかけ

●雅司は親近感をもつことがらが他の子よりはっきりしているので、雅司の興味を示すような助言、たとえば穴のあいたいもを見せた時「何かの虫さんあけたのかね」などして感性にゆさぶりをかけたり、いもはんこでロボットをつくった時「ロボット歩きではんこを押しましょう」とリズム遊びに誘ったりできた。その子どもが何に親しみを感じているか、またその度合いはどれくらいなのか教師が知っていることは、活動にスムーズに入れるちょっとしたきっかけや、想像をかきたてることに有効であると思う。

●穴のあいたいもからいもの中がどうなっているか想像して絵を描いた時、雅司は実にいきいきしていた。大好きなかぶと虫の幼虫がどうしているか想像を働かせ、いもの中身を家に見立て想像したことを表現した。雅司なりの幼ない表現であるがひとつひとつにストーリー性があり、横の智一に一生懸命説明したり、話している途中思いついたことをかきたしたりして楽しいものが出来あがった。穴あきいもを話題にした友達同志の話し合いが十分で感動を高められたこと、そして、中の見えないいもという探察できる、創造できる空間と自由な時間があったこと、さらにいっしょに想像したことを語り合える友達がいたことなどが表現を十分に楽しめた要因と考えられる。あとで子ども達にせがまれていもを切ったのは大失敗であった。秘密として残しておくべきだったと思う。えがく作るの表現だけでなく、いもほりごっこの体表現遊びでも、「今度はこうしよう」といろいろ考えたのは、十分リズムまねっこする時間があつたり、いままで経験したことを連想できる友達とのふれ合いの話し合いの場があったからと思う。指導には十分なゆとりが大切なのだと思う。それがあこがれを実現したいという気持ちをより高めるのではないだろうか。

題材「劇場ごっこ」の中で

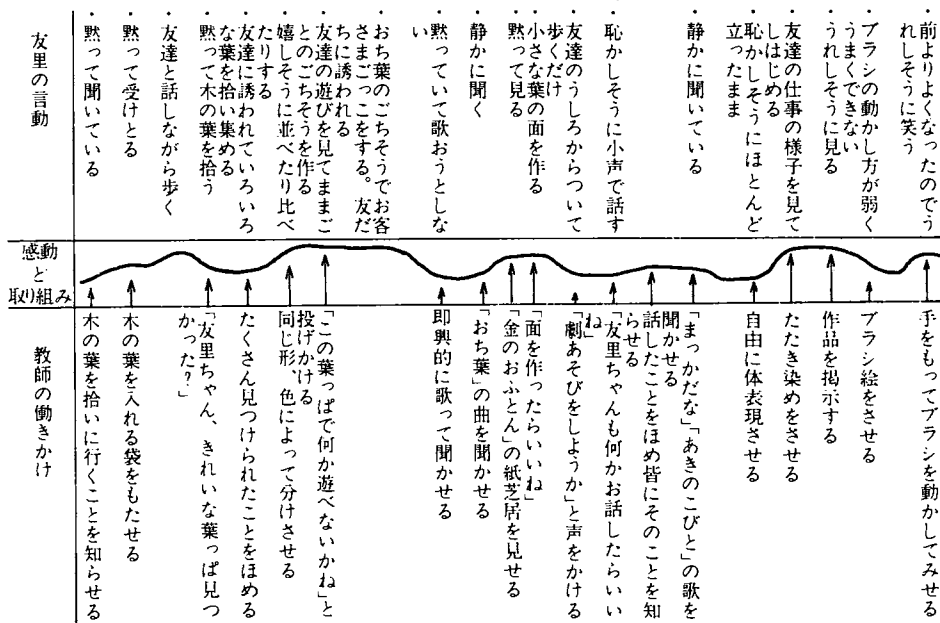


恭子の感動と教師の働きかけ

●恭子は受けた感動やおどろきをいままでの経験などに結びつけて転換や思いつきの表現が多い。たとえばねずみを描きながら一見ねずみとはあまり関係のないようなしかしとてもかわいい即興の歌を聞かせてくれたり、「そうだ指人形にかえよう」と思いつくとすぐやってみたりする。そしてあまりまねる表現はしない。逆にまねることが楽しい子もいれば、空想するのが大好きだったり、空想が苦手だったり、表現のしかたはひとりひとり違うし、その子なりの得手不得手がある。恭子の良さを伸ばしたいと願い、良さを認めかつ、得手でない表現にちょっとした機会を利用して引き込もうとしたが、やや無理があったようだ。恭子が十分楽しんでいる、恭子らしい表現方法を認め保障していくことが一番大切なのだろう。教師の指導のあせりがあった。また、恭子の良さを友達にも知ってもらおうと恭子とのかかわりを設定したが、恭子にとっては自分で考えた表現のせかいでひとりで楽しむことで満足している段階であり、友達といっしょに楽しみたい欲求を自らもったわけではなかったので失敗に終わった。感動のもち方、表現のし方、表現の楽しみ方などその子のもっているその子らしさを全面的に受け入れ包みこむような指導の重要性を知った。しかし、その子の伸びをねがい新しい活動に誘いかけることも必要だと思う。そのとき子どもの発達段階を十分知りその経験がはたして今必要なのか、また誘いかけのタイミングはどうであるか一考するべきであろう。

●このTV視聴のあとずい分たってから自由な活動の中で円すいのくまを作りそれにわりばしをさしてダンスごっこと称してレコードに合わせて遊んでいた。感動やおどろき、そして視聴直後の活動の溜め込みがあったからだろう。感動やおどろきの溜め込みを大切にしたいと思う。溜め込みは必ず別の活動で課題追求を推す力となったり感動源やあこがれに結びついたりするだろう。

題材「落ち葉で遊ぼう」の中で



友里の感動と教師の働きかけ

●友里の場合は無表情に近い感動の表現しかできないタイプの子どものもので、自発性ばかりを待っていたのではだめで、心の刺激を与えるためのことばかけや働きかけをするよう配慮してきた。身近な素材の木で葉で親近感をもたせ、そこから何かあこがれをもたせられたらと思ふことばかけ等を試みた。年少時の経験を生かし、もう一度並べたり、比べたりの簡単な経験を十分に楽しませることから始めた。めずらしく嬉しそうに作業をする。反復の表現を十分に楽しんだ様子だったので、何か別の遊びがないだろうかと思ふと投げかけたが、友里には、それに答えるだけの表現要素がまだそなわっていなかったのだろうか、友達の模倣の表現にとどまっていた。しかし、自分から模倣の表現ができただけでもかなりの育ちが見られた。でき上がった木の葉のごちそうで、うれしそうにまごとの遊びに加わる友里はあこがれをもってごちそう作りに精を出し、今までにないきらきらした表情を見せていた。

●しかし、歌う、ひくの表現のせいかでは、教師の願いとはほど遠い表現しか見られなかった。教師の働きかけ自身に誤算があったと思われ、ただことばかけや働きかけがあっても友里の心を刺激することにはならなかったと考える。それは、教師がある一つの枠をもってそれに近いものを要求しようという考えがどこかにあって、収束的な表現を望んでいたためと思われる。もっと友里の性格や、感性の度合いを知り、友里にあった拡散的な表現を認めていけば、今回のような期待はずれがなかっただろうと思われる。自分から話したくなるような、又歌いたくなるような環境構成を工夫すべきだったと反省している。友里のように表現の乏しい子どもには、教師は、もっともっと広がりや柔らかさをもって対処していかなければと考える。

# 題材「虫となかよし」の中で

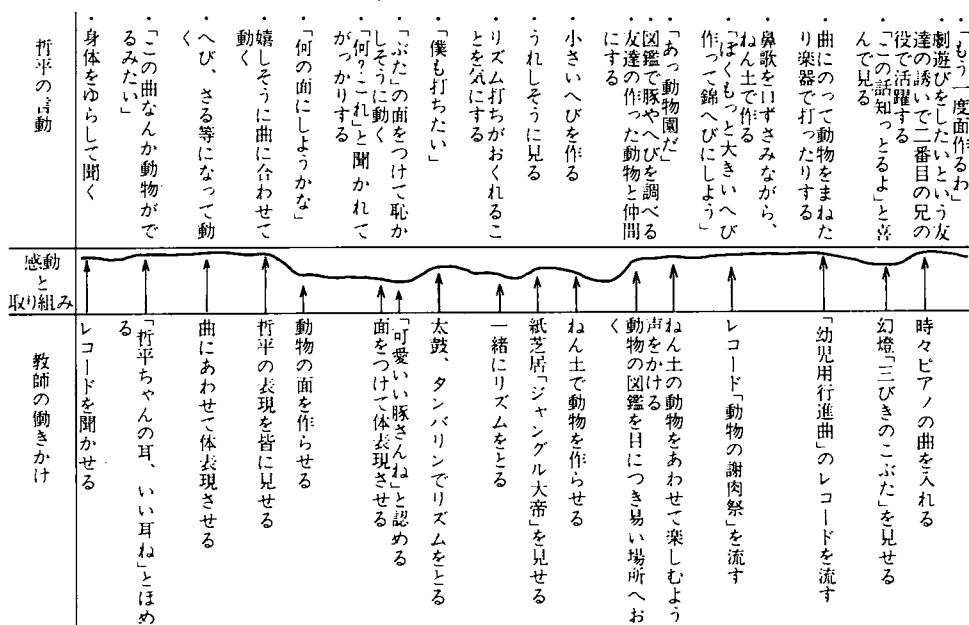
正貴の言動	感動と取り組み	教師の働きかけ
・せりふを言わずだたとびまわる	↑	劇あそびをさせる
・こおろぎの面を作る	↑	面作りをさせる
・鳴き声をきいて喜ぶ	↑	「何って鳴いている？」
・翌日飼育するためえさをつけて持つてくる	↑	「こおろぎってきゆうり好きなのかしら」
・こおろぎ三匹をとり虫かごに入れる	↑	図鑑を広げて見せる
・作った虫かごをもっていそいそと出かける	↑	「たも、図鑑をもっと行くよ」
・「あつてきたぞ」と嬉しそう	↑	「よかったね、やっとなににあうわね」
・黙って横で見ている	↑	手伝って虫かごを完成させる
・あちこちふらふらし友だちのじやまをする	↑	虫の体表現をさせる
・歌う様子がなく部屋の中をとびまわる	↑	「いなかのみちで」の歌を聞かせる
・「岳ちゃんの虫かごに入れたらもうん」	↑	「正貴ちゃんのとった虫か岳ちゃんのとった虫かわからないわね」
・岳央と一緒に図鑑を広げて見る	↑	「こんな虫もとれるかもしれないから虫かご完成させたら？」
・「あつ虫の図鑑や僕図鑑もつてるよ」	↑	虫の図鑑を見せる
・「この箱に入れるからいいもん」	↑	「外から見えてなくてもいいの」
・未完成のままロッカーの上におく	↑	「虫とり遠足に行っても虫入れられないわね」
・「うーんむずかしいなこの箱にするかな」	↑	「せっかくこまでがんばったのにもう少しがんばったら」
・仕事を途中にしてふらふらはしはじめる	↑	友達作品を見せる
・床にすわりこんで仕事を始める	↑	黙って見守る
・はさみ、マジックなどをもつてくる	↑	「どんな虫かごができるか楽しみね」と期待する
・友だちの真似でいちごバックを選ぶ	↑	「中が見えていいわね」と声をかける
・友だちに誘われて材料コーナーへ行く	↑	「何で作ろうかね」
・「むずかしいかな」	↑	「だいじようぶよ、がんばってね」と励ます
・「あつかいいい僕もこなんはんはいいな」	↑	「正貴ちゃんも作ったら？」
・友だちの虫かごを見る	↑	一緒に見る

## 正貴の感動と教師の働きかけ

●認識のせかいでかなり深い感動を示した正貴は、歌う、ひく、えがく、作るの表現では誠におそまつなものしか感じられない。そこで、わりと興味、関心の高い虫の題材で、虫に親近感をもたせたり、虫かご作りでは、虫の入る虫かごを作ろうという期待やあこがれをもたせて正貴の感性を伸ばしていきたいと考えた。友達の作った虫かごに感動を示した正貴を、できるだけ自発性を待ってとりくませるために、たびたびことばかけをしたり、くり返して何度も友達の作品を見せたりしてあこがれが失われないように配慮した。しかし、もともとあきっぽい性格と、一つのことに集中する度合いの少ない正貴を、いかにして最後まで課題にむかってとり組ませるか、大変頭の痛いことであった。途中、何度も葛藤の場が見られたが、教師は気長に待つことにした。正貴が興味を持っている虫の図鑑を見たり、大の仲よしの岳央が困るかもしれない等の話をして聞かせ、虫かご作りに興味がいくように働きかけた。しかし、この2、3日は正貴にとってひょっとして苦痛の日ではなかったかと反省する。ナイロン袋や空箱そのものに虫を入れても、正貴がそれを望んだのだったら無理に、他の子ども達とよく似た虫かごを作らせる必要はなかったのではないかと考え、教師は、もっと広がり柔軟さをもちった態度で子ども達に望む必要があると反省している。

●歌う、ひくの表現にも正貴が苦痛を感じているとすれば、もっと感動をもって臨める与え方はないものだろうか考えなければと思っている。鳴き声をきいて喜んでる正貴の感動をとらえ、一緒に真似たり、ピアノで旋律をつけて歌ってあげたり、簡単な打楽器などで自由に表現させたりなど、十分に楽しむ時間をもたせて、正貴のもっている表現の力を出しきれるよう配慮すべきだったと反省する。

# 題材「動物となかよし」の中で



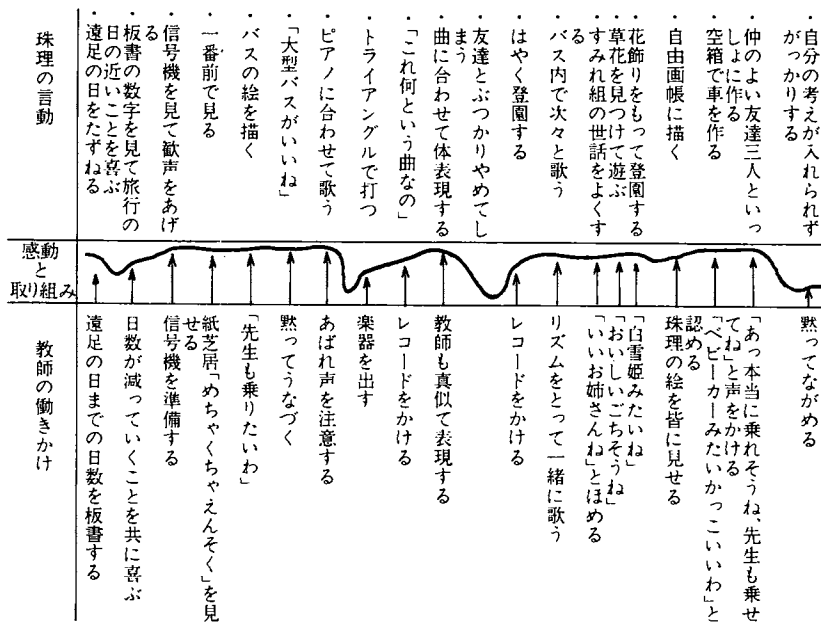
## 哲平の感動と教師の働きかけ

●えがく、作るに抵抗の多い哲平には、歌う、ひくに感性の高い表現のせかいを十分に楽しませ、解放感を味わわせたり、作った物を使って遊びたいというあこがれをもたせるように心がけている。とにかく、音楽を聞くことが好きで、曲が流れるとじっとしてられない性格なので、体表現をさせながら、哲平の良い面を認め、また他の子ども達からも認められる快感を経験させながら、十分に思いをめぐらせ、自己課題をみつけられるようにもっていきたいと考えている。最初面を作った時には、どの友だちからも豚と認めてもらえなくて、かなりショックを受けた様子だったが、哲平らしく表現できたことを教師が認めてあげたことで、その場をのりこえられたように思う。本来の明るい性格もプラスして、その後も何度もその面をつけて楽しんだり、友だちの嘲笑も気にせず遊んでいた。教師が何気なく準備しておいた動物図鑑に関心を示し、四日後には、もう一度作り直したいと言って作り始めた哲平の姿には生き生きとした様子を伺うことができた。でき上った面は、前回と大きな違いがなく、決してじょうずとは言えなかったが、哲平らしく思い切った拡散的な表現があったように思われる。ここでも今までに見られなかった哲平の育ちを見ることができた。

●哲平の場合、気の小さい面もあるので、過去数回、友だちの非難に負け、登園を拒否したこともあったので、そのことを子ども達にも話したり、哲平自身ともたびたび話し合ってきたこともあり、少々の不快感からは、自分で立ち直ろうとする強い面も身についてきた様子である。これは、やはり教師や友だちが哲平を信頼し、哲平を受け入れる姿勢で臨んでいるためと思われる。えがく、作るの感性をさらに豊かにするために、もっともって哲平を理解し、全面的に受け入れなければと考える。



題材「バス旅行」の中で

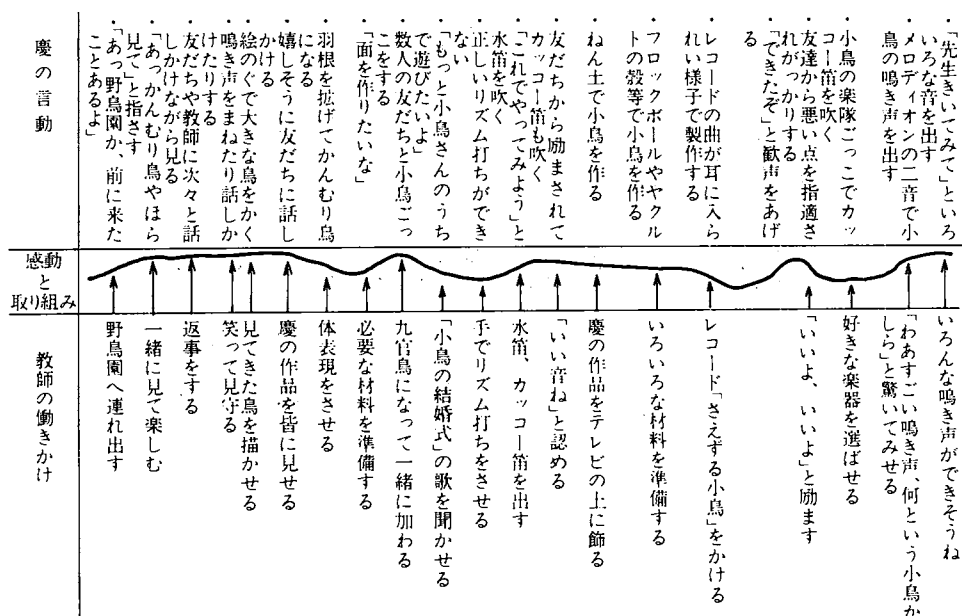


珠理の感動と教師の働きかけ

●教師は過去一年半の経験から、珠理は感性豊かな面をもち、いろいろな活動に対し、自分から課題をもってとり組むことのできる子どもであることを十分に理解してきているので、普段から、さりげない環境構成を試みたり、できるだけ自発性を待つよう心がけてきた。「バス旅行」の題材においても、教師の板書している日に、まっ先に関心を示し、「あっ、何書いてるの。それ何の日なの」と目を輝やかせてたずねてくる。「さあ、何の日かしらね」と期待をもたせて一緒に考えたり、いろいろと予想をたてて楽しむ時間をもった。一年前の経験を思い出していろいろと連想し、予想を立て当日を指折り数えて待っていた。「こんなバスで行きたい」という夢のバスをかいいたり、のり物の歌や体表現にも生き生きと参加していた。調子にのりすぎてあばれ声で歌った時に注意したら、一瞬不快感を味わった様子だったが、もともと明るい性格の珠理のこと、すぐ立ち直り、次の楽器や体表現ではまた伸び伸びと活動していた。ここでも珠理の育ちを見ることができた。

●バス旅行の当日は、さすが年長児としての自覚が見られ、登園時から生き生きとした行動が見られた。バス内での歌う様子を見てみると、普段の園での行動に、さらに解放感が加わり、全く楽しくてしかたがないという様子である。年少の世話も細かい所にまでも気がつき、教師が黙っていても、せつせと世話をしている。また、遠足地で見つけた草花に感動を示したり、首飾りや冠を作って楽しんだり、教師は黙って珠理の行動を認め、一緒に楽しんでいけばよかった。このように、教師が珠理を信頼し、珠理も自由な時間や空間に十分に浸り、表現のせかいを楽しんでいる様子が見られるので、さらに豊かな感性が育つような環境構成や、心の刺激を与える工夫をすべきだと考えている。

## 題材「鳥と遊ぼう」の中で



### 慶の感動と教師の働きかけ

●慶はえがく・作るの表現は非常に豊かであるが、歌う、ひくの表現がどちらかというと苦手なタイプの子どもであるので、教師はこの面をよく理解し音楽を楽しむ場を十分にもたせるよう配慮してきた。特に小鳥に深い関心を持っている慶には、この題材で表現のせかいを伸ばすことが良いと思われた。我が道を行くという慶の性格から、あまりかまひすぎても効果がなかったのでは、できるだけ気長に慶の自発性を待つよう試みてみることにした。慶は家庭でもいんこを数羽世話をしており、その経験を生かして園で飼っているいんこにもかなり親近感を持って世話をしたり、「小鳥さんとお話ができればいいね」等とあこがれも持っている様子が伺える。野鳥園では、小鳥の鳴き声をまねたりいろいろ話しかけたりして自由を楽しんでいる様子が見られた。この感動を歌う、ひくの表現にもっていけないものだろうかと考え、以前から興味をもっていた水笛や、カッコー笛を準備してみた。何も規制せず、自由に吹かせ十分に解放感を味わわせることにした。今までになく喜んで表現していた。メロディオンやオルガン等の旋律楽器では、かなりの抵抗を示していた慶も、水笛ではその抵抗感もなく、ずっと後には、水笛の経験を生かして、メロディオンの二音で表現したり、トレモロらしき表現をして楽しんだり、新しい課題にむかってとり組む等、好ましい育ちがみられた。

●まだ旋律をひくことには抵抗があり、根気よく練習しようというたくましさに欠ける慶に、もっともっと葛藤の場を経験させ、苦しみを乗り越えたあとの快感を味わわせたいと思い、慶の好みに合った簡単な曲から身体でリズムを体得させ、教師と一緒に楽しんだり、試みたりしながら、長い時間をかけて指導していきたいと考えている。